



人間の生活に関わる事象を科学的に研究する「人間生活学研究科」での学びが、なぜ、いま必要とされるのか。学びを通して、何が得られるのか。そして世の中に、いかに貢献できるのか。学長、研究科長、教授の対談で、その魅力をお伝えします。

社会が求める「知のプロフェッショナル」 人間生活学研究科が果たす役割

田中 弘之 教授
東京家政学院大学大学院
人間生活学研究科長

上村 協子 教授
家政学専攻主任

海野 知紀 教授
栄養学専攻主任

井上 清美 准教授

現代社会の課題を解決する「人間生活学」とは

人間生活学がめざすのは、
持続可能な社会の実現をめざして行う
教育・研究活動

田中：本学の研究科の役割について話を進めたいと思います。研究科の名称を「人間生活学研究科」としているのは、人間生活学を、人間の生活に関わる事象を科学的に研究する学際的な学問として位置付けた、この研究科を設立した時からの考えです。人間がよりよい生活を送るために、さまざまな活動をしてきた結果、現代社会では種々問題が生じてきています。私たちの生活をより便利で豊かにするという限定的な価値観によって、地球温暖化、生物多様性の喪失などの問題が生じています。私たちの良質な日常生活や、経済成長という事業活動は、社会的諸問題とも密接に関係していると考えます。こういった課題を研究する取り組みというのは、人間の生活を科学する家政学院において、まさに両専攻の共通

テーマではないかと思います。

鷹野：そうですね。大学院では一人ひとりが人間生活と環境との関わりについて認識と理解を深める教育研究活動が必要だと考えます。それは環境教育やSDGs、課題の解決につながる新たな価値観や行動などの変容をもたらし、持続可能な社会を実現することにもつながります。また、本学設立者の大江スミ先生のお考えは、国際社会をリードする女性を育成したいというものでした。男女共学である本学大学院では、男女を問わず、ともに切磋琢磨し、徳性を養って人間として成長し、地域・国のレベルを超えて互いに影響を与え合うような、国際社会をリードする方を育てたいという思いでいます。

田中：問題の解決につながる新たな価値観や行動などの変容を考えると、グローバルな人材育成には、深い学びが必要ですね。

鷹野：学部ではその分野の基礎的なことを学びますが、大学院の価値は、社会的な事柄や専

門的分野にいたる研究課題を見い出して、その研究分野の課題を深く学ぶことで、さらに院生自身の成長も促すということにあると思います。大学院の修了後は、学部よりさらに深みと幅の広さを持って、活躍されている方が多いと思います。

社会的意義を果たすための研究とは、
まず生活者の視点に立つことから

海野：SDGsは、基本的に人間そのものに視点を置き、人間の生活の価値は普遍的であるとの考えに基づいて目標設定されています。その意味では、人間生活学研究科が対象とする研究も、やはり人間が真ん中において、人間と人間、人間と環境、人間と社会といった相互の現象を、SDGsという開発目標と絡めて研究していくことが考えられますので、まさしく人間を中心とした研究がテーマと理解しています。

上村：学部でも、生活の質を重視する生活者

の視点に立って、人間生活における私たちの日常的な行為、毎日の暮らしと、それを成り立たせる生活の諸条件の相互作用について研究して、持続可能な生活の創造に貢献する実践的総合科学を研究するという方向性を掲げて

います。ただ、学部の授業では理念より活動や実態に主が置かれますが、大学院では日常を積み重ねて考え、背景の理念や理論を深め、専門性を高めます。本学は、「生活者の視点から」研究することに特色があります。一人ひとり

のウェルビーイングを大事に行動変容し、国や経済・社会や大きな領域に影響を与える核となる社会的意義ある学問として、いま、持続可能な社会の創造を目標にしています。

「人間生活学研究科」の成り立ちと、2つの専攻

生活と文化の融合から生まれた研究科

田中：本学の研究科の成り立ちについて、少しお話ししたいと思います。2専攻に分けた際に研究科長をしておられた海野先生いかがでしょうか。

海野：1995年に人間生活学研究科が設置された時には、生活文化専攻という一つの専攻でスタートしました。当時は人文学部と家政学部という2つの学部構成でしたので、それを生活文化という視点から研究していこうということでスタートしました。時代の流れの中で学部が再編され、新たに人間栄養学部が設置されました。それに合わせる形で大学院についても家政学専攻と栄養学専攻の2専攻に改組しています。成り立ちの経緯で特筆すべきこととしては、生活と文化を融合させた研究というのが当時はほとんどなかったというところで、家政学院ならではのユニークな研究が行われたのではないかと考えていま

す。

田中：学部在学中には、高校までに学んできたような知識を発展させて、社会活動につなげていくという目標があります。例えば人間栄養学科では資格取得、または他学科を含め、社会に適切な対応をするということから、いろいろな側面においてとらえることができる知識や体験を得るという学びがあります。大学院の栄養学専攻では健康の保持増進、疾病予防とその重症化予防などを栄養学的な見地から教育・研究して、ライフステージに応じた活力ある人生を送るための必要な課題に取り組むということ、また家政学専攻においては人間生活に関わる総合的かつ専門的知識、または技術を教育研究する中で現代社会が直面するいろいろな課題に対して実践的に貢献する、というふうに設立の中で述べています。こういったところから、両者とも社会に有意な人材を養成することを目的としているということに、この2つの専攻設置の経緯が

あると思います。

上村：歴史的に本学は、イギリスから学んできた家事・家政といったケアを日本の生活の質をよくするために科学的にバージョンアップし、科学としての日本の家政学としてアレンジしてきた大学です。また、それを考えるのは科学者だけではなく、私たち生活していく人間だという当事者性を、創立者の大江先生は示しました。KVAのV、徳性を持った人間がちゃんと知識や技術を使いこなしていけないと、人間の生活の質の向上はないという、ある意味、生活思想的なものをど真ん中の総合家政として置いたところが東京家政学院の人間生活学研究科の特色かなと思います。

鷹野：「科学として」という点において、大学・大学院で展開する意義がありますね。そういった歴史をこの100年積み重ねているということの重みを改めて感じます。本学は今後、ますます生活者の視点に立った生活の科学を発展させていかなければいけませんね。

学部との学びの違い、本大学院で得られる能力

大学院には、実践者とその未来に
役立つための研究がある

田中：続いて、学部との学びの違いと大学院で得られる能力ということについてお話ししたいと思います。先にもお話ししましたが、問題の解決につながる新たな価値観や行動などの変容すること、持続可能な社会の実現をめざして行う学習・教育活動が必要だということ、大学院の私のイメージです。このことは、持続可能な社会を実現するためのさまざまな課題を見い出して、その達成を図る意欲的な教育・研究をしていくということになると思います。これらを、学部の時期も含めて段階的に学んでいく過程に、多種多様な方々とまず知り合うことが必要ではないかと

思います。それによって価値観を広げる、そして一つの結果にとらわれずに、二次的・三次的効果を生み出す知識と創造力を身につける。このことを基に、それらをほかの方々へも伝えて、主体的な行動ができるという能力を得ること、そして互いの影響力による反応する力を身につけることが大学院のめざしているところです。

鷹野：そうですね。価値観を広げるということは本当に重要だと思います。大学生の段階でもいろいろな方と出会って、学びを深めたり広げたりしてほしいのですが、次の段階として、大学院でさらに多くの方々との出会い、交流することに大きな意義があると思います。国内のさまざまなバックグラウンドの方、海外から日本を訪問される方、海外在住の方、

そういった方々の多様な価値観を知ること、見方が変わる。現在、国際的な情勢を抜きにして、私たちは生きていけません。さまざまな価値観を知って、日本国内だけでなく、地球上のさまざまな所にいる人たちそれぞれが幸せを感じられるように、私たちは社会に貢献していかなければならないと思います。

上村：生活者の視点で行動変容していく時に、今まで、どちらかと言うと、家政学は内向きのイメージがあって、自分たちの暮らしを守るとか、社会と言っても比較的狭い価値観で共生し協働し生活選択をしてきたと見られがちでした。今後は鷹野学長がおっしゃるように、国際的な状況を見ながら、多様な立場や文化で暮らす人の価値観を理解しながら、自分の立ち位置を外に向けても発信していくという

ことも非常に重要だと思います。

志を外に向けて伝えていく、
人に影響を与えられる人になる
ということ



海野：学部と比べて、大学院では研究活動が主体になります。研究は「仮説を立てる」とよく言うんですけども、問いを立てることからスタートします。ただ、その仮説を立てるた

めには世の中がどういう状況なのか、あるいはもう少し具体的に言うとか先行研究にはどういふものがあるか、そういったことをしっかり調べなければなりません。私の分野で言うとか先行研究を調査し、仮説を立て、仮説を実験に基づいて検証していきます。そして、仮説が正しかったのかを考察していきます。研究成果は、世の中の多様な価値観を持った方に説明することが求められます。その意味で、研究活動を通してコミュニケーション能力も培っていけるというのが大学院のよさだと思います。

井上：指導している院生を通して大学院教育で実感しているのは、一人ひとりが人間生活に対する認識と理解を深めて、深めるだけではなく、課題の解決に関わるような行動変容につなげるということをどの専攻も非常に大事にしているということです。大学院生の日々の様子から、その点を先生方が強く意識して教育をされていることが伝わってきま

す。またそれは、学部教育・大学院教育に共通する、家政学のよさでもあります。私が指導している学生は学部から大学院に進学しましたが、海野先生がおっしゃるように、学部では、卒業研究を通して研究とは何かというところから始まって、問いを立ててそれを考察していくという、本当に研究の初めての一步をやってみて、さらに深く知りたい、突き詰めて考えてみたいという思いが強くなって大学院に進学しました。

田中：突き詰めたいという気持ちは、時に周りにも影響を及ぼしますよね。先ほど創立者の大江先生の話が出ましたが、本学の建学の理念にある「KVA精神」に基づいて、学部の時期は物事を実践して体得していくとしたら、大学院での学びの中では、周りとともに高め合って、人に伝えていく、言わば、周りによい影響を与えるような人として成長できる人材を育成するのが大学院の使命かもしれませんね。

より高度な知識の修得につながる、教育・研究体制 本大学院での研究を、社会でどう活かしていくか

多様な世代がともに学び合う、
新しい大学院の姿

田中：学部と大学院のめざすべきところを達成するためには、より高度な知識の修得につながる教育・研究体制ということが必要になってきます。具体的なことについて話を広げていきたいと思います。本学の大学院は、よく担当教員の多さに注目されますが、それは一つのポイントだと考えています。例えば領域間の専門分野の共有を図って幅広い知識が得られる、またはゼミ形式などの研究、修士論文の作成時に個別的な対応が図れるという利

点に思われます。また、履修についても、ほかの大学や、他専攻における授業科目の履修を認めている*ところも本学の大学院の教育・研究体制の魅力ではないでしょうか。このあたりは、実際に院生指導をされている井上先生、どのようにお感じになりますか？

井上：今年度入学した院生を指導していて感じるのは、成長が著しいということです。いろいろな先生と対話をし、院生同士でディスカッションを重ねることで、どの授業も少人数のゼミ形式ですので、本当に短い期間で成長してくれています。多くの学術書や論文を読むようになって、ディスカッションで出てくる言葉や文章が著しく向上しました。私が指導している院生は、家庭科の非常勤の教員をやりながら大学院で研究を進めています。研究テーマは「家族とは何か」、家族の多様性について考えたいということで院に進学しましたが、家庭科の中で家族をどのように教えていったらいいのかということを、自分が大学院で学んだことを取り入れながら、新しい授業内容にチャレンジしています。それがまた現場の先生方にも受け入れられ、教育の

現場や社会に貢献できているという実感も持ち始めているようです。

上村：いま、とても大事なお話をしていたと思います。最近、総合知という言葉が日本のいろんなところで言われていますね。課題解決のために、専門分化された知識を総合する。そちらの専門のことは分からないで止めない。ディスカッションをして、私の立場としてはここがよく理解できない、自分がどうしたらいいのか、アドバイスを欲しいとか、違う領域の方とディスカッションしながら専門を深めていく持続可能な社会には、総合知が大事で、本学はそれを大切にしております。いろんな先生が全然違う話をされて、でも、どこかで共通点を探そうと先生方がしていっている。総合的な科学を確立させるためにはこういうスタンスが必要なんだと学んでいくところが特色です。多彩な領域の先生方がいらっしゃるところで、少人数で学べるのはぜひいたく環境だと、院生からもよく聞きます。

井上：多彩な先生方ということに加え、今年私が担当している生活経営学特論では、科目

等履修*の学生さんが来てくださいます。50代から70代までの、さまざまな世代の方が履修されました。家庭科の教員を長く、もう30年以上やっていらっしゃる方もいれば、家政学の研究者をされている方もいましたし、本学の卒業生で、3人お子さんを育て上げて、今後の生きがいを考えるために学びたいということで来てくださった方もいらっしゃいました。「学び直し」と言いますが、学び直しというより学びを深めたい、新しく学びたいという意欲が皆さん非常に高く、とにかく学生になるのが嬉しいとおっしゃっていましたし、よい刺激を私自身ももらいました。これからの家政学や家庭教育の発展を考えると、男性も女性もともに学ぶ、ともに学びを



本大学院への入学をめざす皆さまへのメッセージ

好奇心こそが可能性の広がりにつながる

田中：最後に、本学大学院をめざす方へのメッセージを両専攻主任からいただけますでしょうか。

上村：家政学専攻では身近な生活への好奇心・問題意識が教育者になるにも研究者になるにも重要です。食文化に興味を持って入学した院生がいました。彼女は食と家庭経済を合わせたような、日本と韓国における食生活の変化と特徴、統計調査研究をして、食文化と食政策をつなぐユニークな修論を本学で書いた後、さらに学びを深めたいと、お茶の水女子大学の大学院、そして、オランダのライデン大学へと進み、博士号を取得しました。現在は、韓国の大学で招聘教授、本学で客員教授としても活躍しています。日常生活や経験を起点にする学びというのは、人との出会いを呼び、本当に学んだ先にいろいろな世界、広がりがあ

深めていくということが欠かせないと思いますし、またジェンダーに拘わらず、多様な世代の人が家政学と一緒に学ぶということが非常に大事だと思います。

上村：誰でも何歳になっても自分の生きる可能性を広げるために、社会に貢献するためには、1人で抱え込んでしまってはできない。それを学ぶために、本学の人間生活学研究科というのは向いた構成になっていると思います。

海野：大学院で学ぶ目的というのは、専門知識をつけるとか、スキルを身につけるとか、そういうことももちろんではありますが、やはり理論的な考え方とか、問いを立てて、最終的な課題解決に向けてどのような取り組みをしたらいいか、ということまでの一連の流れを学ぶ機会、自分なりの答えを出していく機会でもあるかなと思っています。スキルだけではなく、知識だけではなく、そういった考え方が社会において活用できると思います。社会に出る前にこういうスキルを身につけて入学されてくる方もいますし、逆に一度、社会に出て、社会における問題点を抱えた中で大学院に入学してきて、教員とともに研究活動を進めていく場合もあります。つまり、大学



院から社会へというのと、社会から大学院へという、その両方の矢印がある*ということですね。学部で卒業した方が社会に出て、大学院に戻ってくる、そして大学院での研究を社会に活かすという、KVAの精神が学部・大学院・社会へと受け継がれていく、本学の学びが社会と連続できる環境が整ってくるというなと思っています。

田中：社会に出るという目的を持って研究している方、社会に出て課題などを見いだして大学院に戻ってくる方、多様な学生さんの意志に是非応えていきたいと思いますね。学部卒から次の学びにおいては、経済的自立を得て、そして学び始める形も、新しい大学院生の在り方かなとも思いました。

して複数名で指導していく体制になっています。4年生からの進学、それから卒業した方がここに帰ってきていただけるような、そういう多様なニーズに応える大学院をめざしています。

田中：本日は多彩な議論ができてよかったと思います。今後も大学院生とともに発展的に取り組んで参りましょう。

